令和２年度
履中天皇 百舌鳥耳原南陵倒木復旧に伴う調査

はじめに

履中天皇百舌鳥耳原南陵は大阪府堺市西区石津ヶ丘に所在する墳長約 365 ｍの前方後円墳で、遺跡としての名称はミサンザイ古墳である。

平成 30 年９月に日本列島へ上陸した台風 21 号は近畿地方を中心に甚大な被害をもたらしたが、陵墓も例外ではなく、当陵では東側の墳丘第１段平坦面から後円部墳頂を主として倒木が多く発生した。これらの倒木のなかには幹が折れずに木全体が倒れ、土をかかえて根ごと起きあがってしまったもの（以下、根起きとする）も多くあった。当庁では台風の通過後に陵墓地内の被害状況の把握につとめたが、当陵における根起き箇所のうち、複数箇所で埴輪が露出していることを確認できたため、状況の確認と精査をおこなって記録化し、埴輪を回収する調査を実施した。

調査は令和３年３月 11 ～ 19 日におこない、陵墓調査室の加藤一郎と土屋隆史が担当した。なお、この調査を実施するのにさきだって、根起き箇所の位置を正確に把握するために、当陵の外堤にＩＴＲＦ（国際地球基準座標系）にもとづいた世界測地系の平面直角座標第Ⅳ系による２級基準点を３箇所、３級基準点を１箇所に設置するための立会調査を実施したので（担当：土屋隆史）、あわせて報告する。調査の実施にあたっては堺市の十河良和氏、永井正浩氏、小林和美氏、田村唯史氏、相馬勇介氏からご指導を賜った。（加藤一郎）

１．２級基準点および３級基準点設置に伴う立会調査

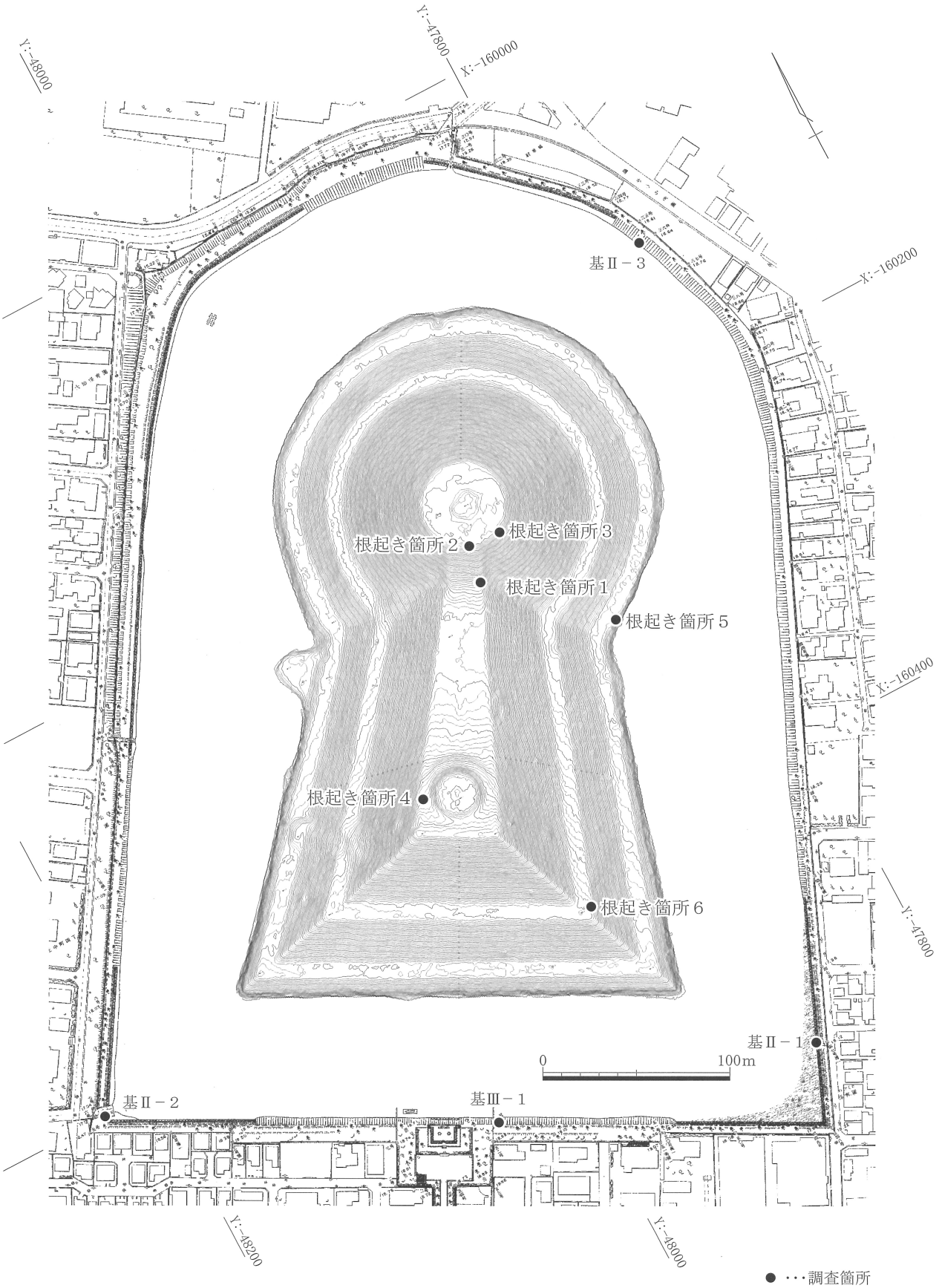
倒木箇所の調査を実施するにあたり、墳丘内に世界測地系に即した測量杭を設置することが不可欠となった。そのため、外堤上（当陵については二重周濠の存在が推測されており、本来であれば中堤と表記するべきであるが、ここでは便宜的に外堤と表記する）に２級基準点３点と３級基準点１点を永久標識として設置する必要が生じたことから、深さ 60 ～ 80㎝の規模でそれぞれ掘削した（第 50 図）。以下、それぞれの地点における土層の状況を説明する（第 51 図）。

外堤南東部（基準点Ⅱ－１箇所）では縦 76㎝、横 72㎝、深さ 82㎝を掘削した。表土下から黄褐色の造成土（Ⅱ層）を検出した。この土は真砂土かと思われる締まりのない土であり、深さ 70 ㎝以上続いている。地表下 65 ～ 70㎝からは土器片（第 52 図１）が出土した。外面赤褐色を呈しており、内面には轆轤成形によるナデ調整がみられる。備前瓶あるいは徳利の胴部片であり、江戸時代のものであると考えられる。

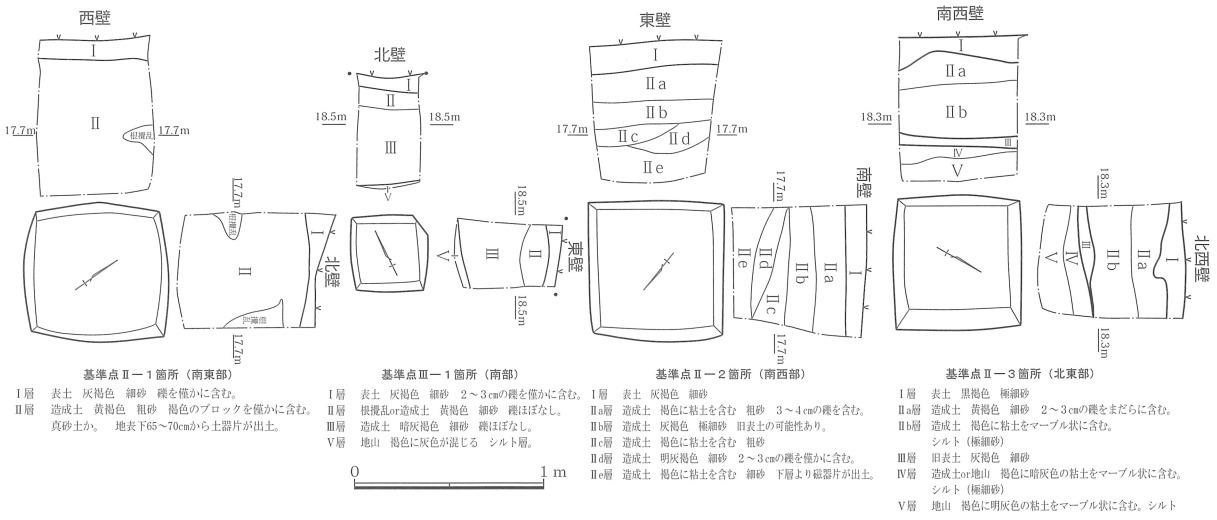
外堤南部（基準点Ⅲ－１箇所）では縦 40㎝、横 40㎝、深さ 60㎝を掘削した。Ⅱ層は根攪乱か造成土か確定できない。Ⅲ層は造成土であり、40㎝ほど堆積している。Ⅴ層は地山であり、乾痕がみられる細粒砂を含んだ灰黄褐色土である。標高 18.21 ｍ付近から確認できる。

外堤南西部（基準点Ⅱ－２箇所）では縦 74㎝、横 70㎝、深さ 74㎝を掘削した。表土下から造成土を検出した。造成土は色調から５層に分かれており（Ⅱａ～Ⅱｅ層）、10 ～ 20㎝間隔で堆積している。Ⅱｂ層は旧表土層である可能性もある。地表下 70㎝付近のⅡｅ層からは磁器碗の破片が出土した（第 52 図２）。彎曲具合からみて、体部下位～高台部に相当する。高台部には染付による二重の青い横線みられ、体部下位には左斜め上方向の青線がみられる。18 世紀頃の肥前磁器染付碗であると考えられる。

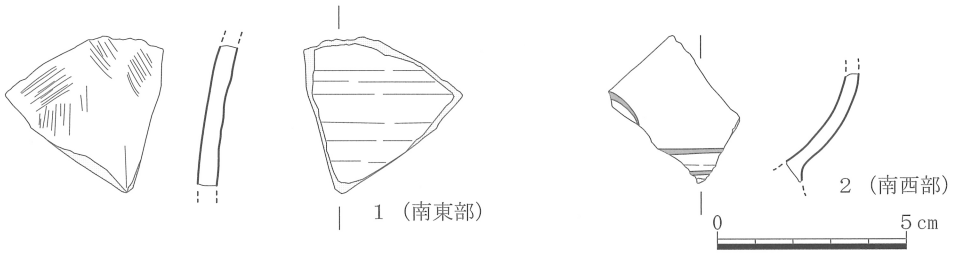
外堤北東部（基準点Ⅱ－３箇所）では縦 72㎝、横 68㎝、深さ 76㎝を掘削した。表土下には造成土（Ⅱａ・Ⅱｂ層）が 46㎝、造成土の下の標高 18.24 ｍからは旧表土と考えられる灰褐色の層（Ⅲ層）が６㎝堆積している。また、旧表土の下からは盛土（Ⅳ層）と考えられる層が検出される。古墳時代の盛土かあるいは後世の盛土かは確定できない。標高 18.16 ｍからは褐色に明灰色の粘土を含む層（Ⅴ層）がみられ、これは地山である可能性が高い。地山の高さは外堤南部に近い。一方、外堤南東部と南西部では標高 17.5 ｍ付近まで造成土が確認されており、外堤でも場所によって後世の造成のされ方が異なっていたと考えられる。（土屋隆史）



第 50 図　百舌鳥耳原南陵　調査箇所位置図（1/3,000）



第 51 図　百舌鳥耳原南陵　基準点設置箇所の平面図および断面図（1/40）



第 52 図　百舌鳥耳原南陵　立会調査　備前焼・磁器実測図（1/2）

２．根起き箇所の調査

今回調査することとなった根起き箇所は計６箇所で、その位置は墳頂部の隆起斜道上面の東端付近（根起き箇所１）、後円部墳頂平坦面の南端付近（根起き箇所２、３）、前方部墳頂平坦面の西端付近（根起き箇所４）、墳丘第１段平坦面の東側くびれ部付近（根起き箇所５）、墳丘第２段平坦面の前方部東側隅角付近（根起き箇所６）である（第 50 図）。

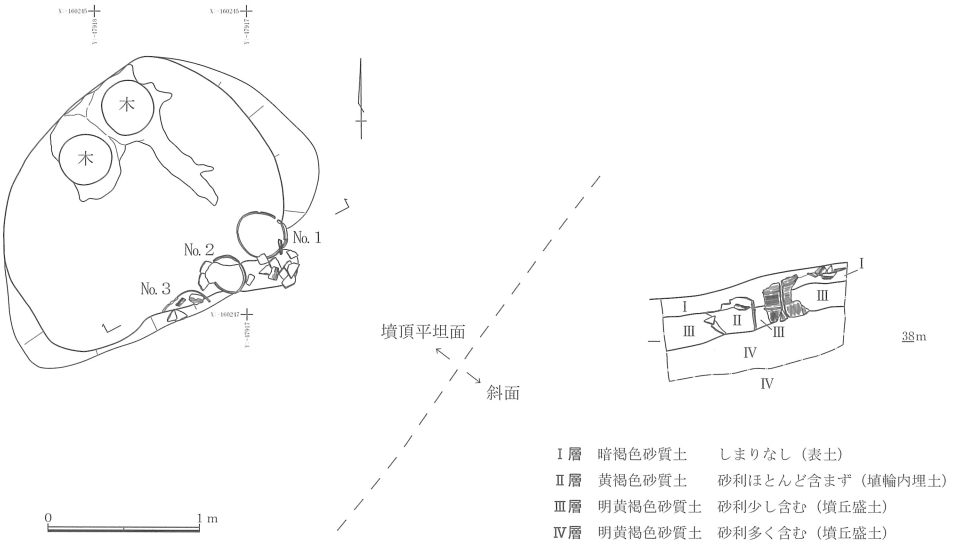
すでにふれたように、当該台風による倒木被害は墳丘の東側を主としており、そのことは台風直後におこなった調査室員による状況把握のための検分でも確認していた。その検分では埴輪の露出箇所が５箇所（根起き箇所１～５）におよぶことを確認しており、それにもとづいて露出箇所の調査を実施すべく現地に入ったが、調査中に当陵内をあらためて踏査したところ、あらたに１箇所で埴輪の露出を確認したため、その箇所（根起き箇所６）についても急遽調査することとした。

（１）根起き箇所１（第 53 図、図版 47）

台風直後は木が横転した状況であったが、調査時には不完全ながら元の状況に戻った状態であった（図版 47－１）。しかし、埴輪が露出しており、列状に並ぶ状況がみてとれたため、築造時の円筒埴輪列設置状況に関する情報の回収を意識して調査をおこなった。なお、根起き箇所の直径は約２ｍであった。

調査の結果、隆起斜道上面の東端に設置された円筒埴輪列を構成する円筒埴輪３個体分が露出していることを確認した。この円筒埴輪列は墳頂平坦面から墳丘第３段斜面への傾斜変換点から約 2.7 ｍ内側に位置する。

根起き箇所という性質上、木の根による攪乱が多く入っていることに留意しなければいけないが、調査の結果、表土の直下に墳丘盛土面のあることがわかった。現状では、円筒埴輪列の設置に伴う掘方は確認できないため、墳丘盛土と同時並行で円筒埴輪列も設置されたものと推測される。円筒埴輪の設置にあたっては、円筒埴輪の第１条突帯付近まで内外に盛土をほどこしていたようである。なお、調査箇所は隆起斜道のなかでも比較的勾配がゆるやかな地点であり、現状では円筒埴輪列を設置する際に、水平に調整するような造作



第 53 図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所１　平面図・断面見通し図（1/50）

は確認できていない。

なお、この根起き箇所１で確認された遺物は 806 点であった。

（２）根起き箇所２、３

後円部墳頂平坦面上の根起きであり、台風直後に丹念に確認した際に形象埴輪片を確認したものの、円筒埴輪列などの存在は確認できなかった。その際は調査にいつ着手できるかが不透明であったため、遺物は回収しておき、採集位置にピンポールを目印として立てておいた。したがって、今回報告する調査ではそのピンポールの位置の座標を計測したのみであり、図面などは作成していない。なお、調査時にあらためて遺物の有無を確認したが、確認することはできなかった。

（３）根起き箇所４（第 54 図、図版 47）

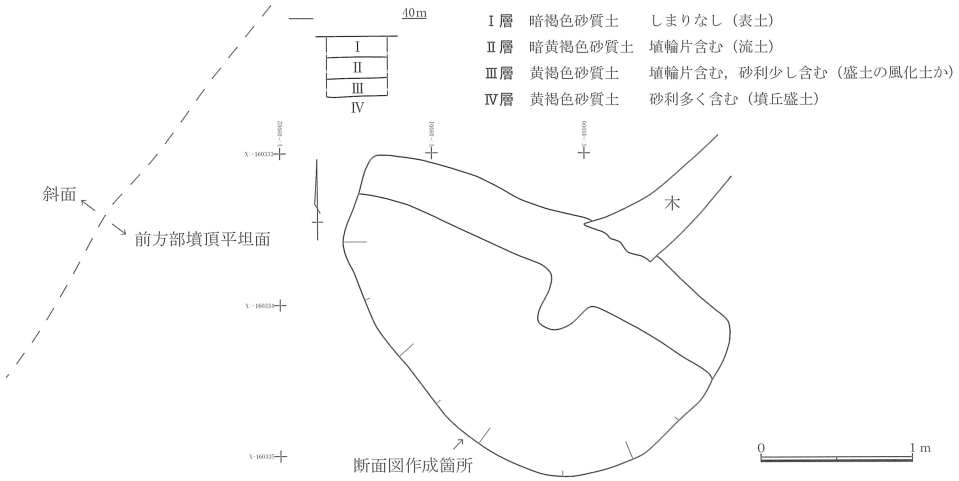
前方部墳頂平坦面の西側に位置し、かつて多くの形象埴輪が採集されている前方部墳頂平坦面上の円丘にも近い。この根起きの直径は約 2.6 ｍであった。位置から判断して、前方部墳頂平坦面の西端に設置された円筒埴輪列が検出されることを想定したが、確認できなかった。

確認された土層は、上から表土（Ⅰ）、流土（Ⅱ）、墳丘盛土が風化あるいは木の根による攪乱をうけたと思われる土層（Ⅲ）、墳丘盛土（Ⅳ）であった。土層断面を柱状に示したように、地表下約 40㎝で墳丘盛土面となることが確認できた。なお、この根起き箇所は墳頂部から墳丘第３段斜面への傾斜変換点から最も近い位置で約 1.2 ｍ離れていた。この根起き箇所４で確認された遺物は 392 点であった。　（加藤）

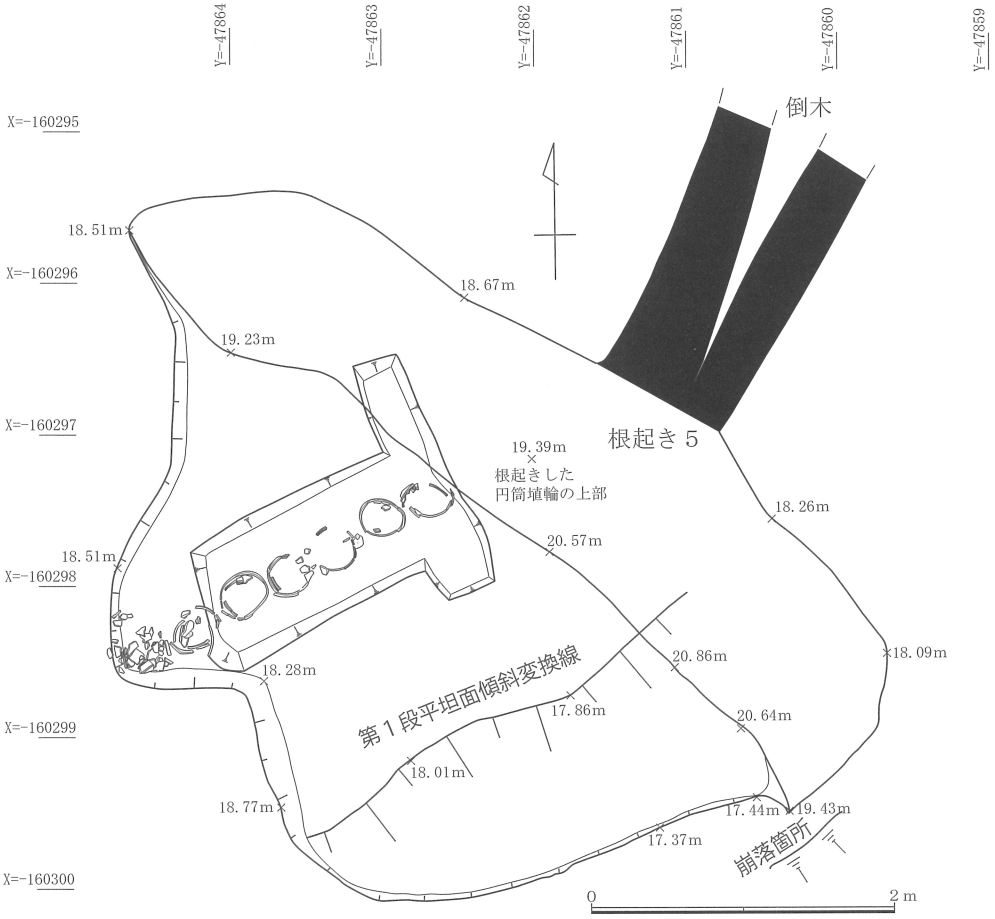
（４）根起き箇所５（第 55 ～ 57 図、図版 48 ～ 49）

根起き箇所５はくびれ部第１段平坦面東側にあり（第 50 図）、第１段平坦面から第１段斜面へと下る傾斜変換点の近くに位置する。木が北東側に倒れ、１段目平坦面に根起きが生じた。根起き箇所の大きさは、東西長 5.1 ｍ、南北長 4.7 ｍであり、根起き部壁面の最大高約 3.0 ｍ、根起きによる穴の深さ 0.12 ～ 0.22 ｍである（第 55 図）。精査の結果、上から表土、流土（木の根による撹乱）であった。流土下の土は水分を多く含んでおり、加えて根起きにより土が乱されていたため、土層や葺石の有無の観察は困難であった。根起き箇所南側では、第１段平坦面の傾斜変換線がみられ、第１段斜面の上部がわずかに確認できる。第１段斜面の下部は濠水に近いため崩落しており、確認することができなかった。

埴輪列（第 55 ～ 57 図）　根起き部壁面の床から 1.1 ｍの高さ（標高 19.39 ｍ）では、円筒埴輪片がみられた。これは、地面から持ち上げられた円筒埴輪上側の破片であろう。また、根起き箇所の下側からは原位置の円筒埴輪列を確認した（第 55 図）。円筒埴輪は、第１段平坦面が第１段斜面へと下る傾斜変換点から、1.3 ｍほど第２段斜面寄りに設置されていた。上層にみえていた円筒埴輪５個体分の設置状況を図化した上で（第



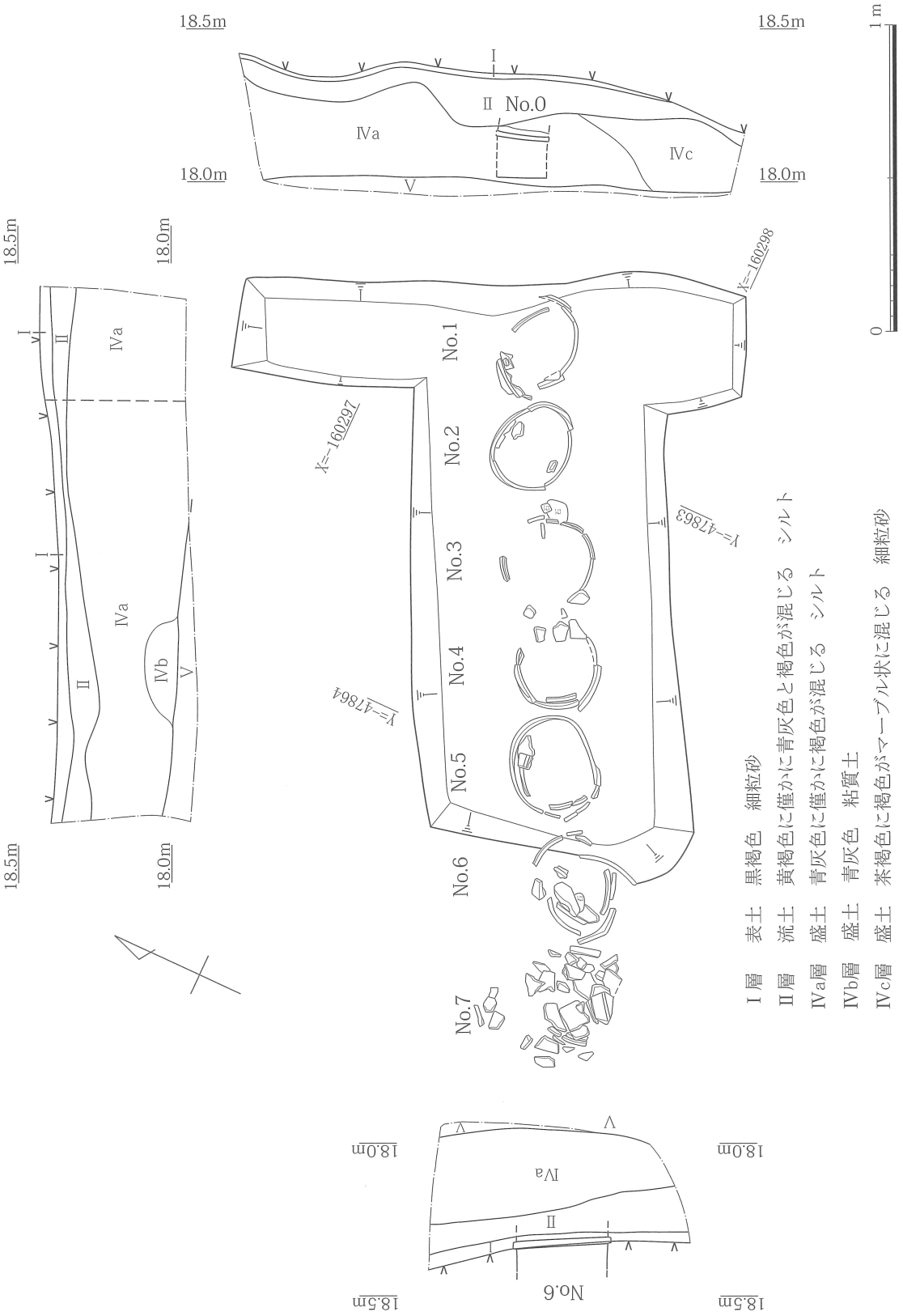
第 54 図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所４　平面図・断面図（1/50）



第 55 図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所５　平面図（1/50）

57 図上層）、掘り下げたところ、円筒埴輪７個体分を検出した（第 57 図下層）。これらを東からNo.１～７と呼ぶ。円筒埴輪は傾斜変換線と平行方向に、それぞれ４～８cmほどの間隔を空けて設置されていた。

埴輪列の中でも、埴輪No.１～５については、南側から底部まで掘り下げた。埴輪No.１・２・４・５は第２条突帯上まで、No.３は第１条突帯上までが残存していた。埴輪No.１・２の設置高は標高 17.99 m、埴輪No.３の設置高は標高 18.06 m、埴輪No.４の標高 18.02 m、埴輪No.５の標高 18.03 mである。埴輪No.３はやや設置高が高い位置にあり、底面も斜めに置かれていることから、径７cmほどの礫を底部下に置いて、設置面が調整

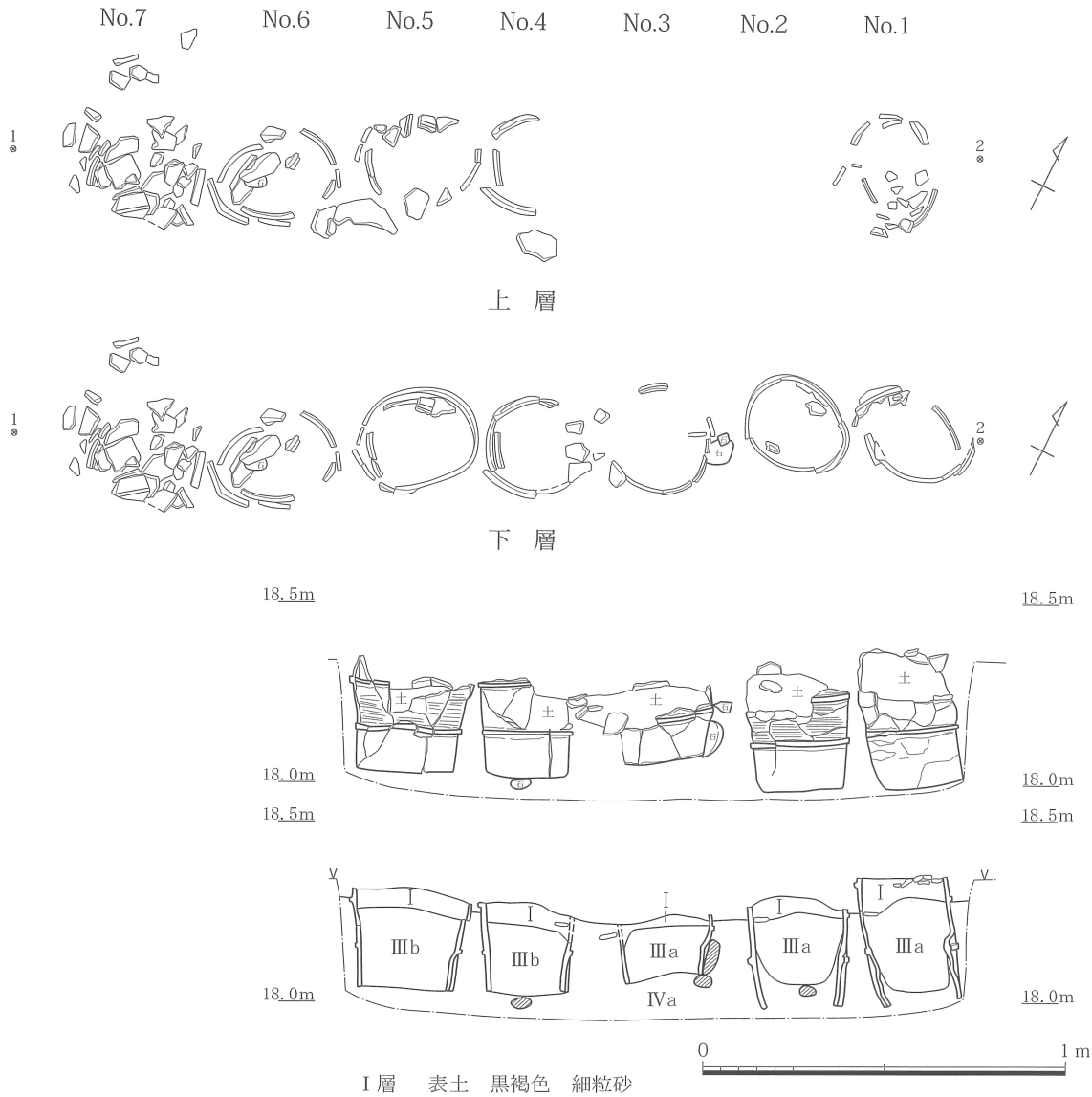


第56図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所５　埴輪列掘削所平面図・立面図・土層図（1/20）

されている。

また、埴輪№１～５を半裁し、土層の状況を確認した。墳丘盛土は標高18.30ｍより確認され、埴輪№１・２・４・５は第２条突帯付近、埴輪№３は第１条突帯上まで墳丘盛土で埋められていた。

埴輪内部には埋土がみられる（Ⅲａ層、Ⅲｂ層）。これらは墳丘盛土（Ⅳａ）と同質の土であり、埴輪の



Ⅰ層　表土　黒褐色　細粒砂
Ⅲa層　埴輪内埋土　青灰色に褐色が多く混じる　シルト
Ⅲb層　埴輪内埋土　青灰色に褐色が僅かに混じる　シルト
Ⅳa層　盛土　青灰色に僅かに褐色が混じる　シルト

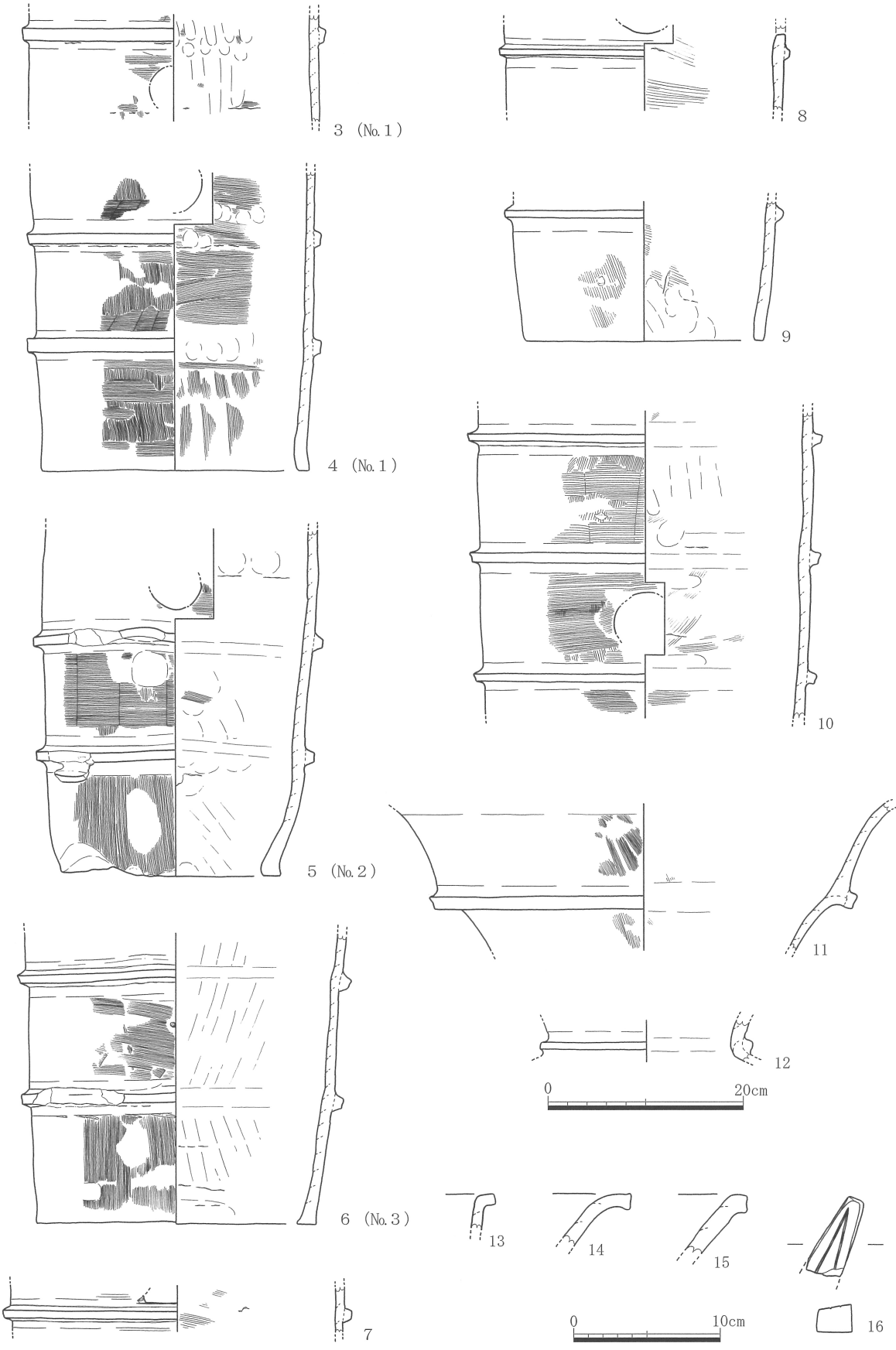
第 57 図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所５　埴輪列平面図・立面図・半裁土層図（1/20）

外部と内部が同時に埋められたものと考えられる。

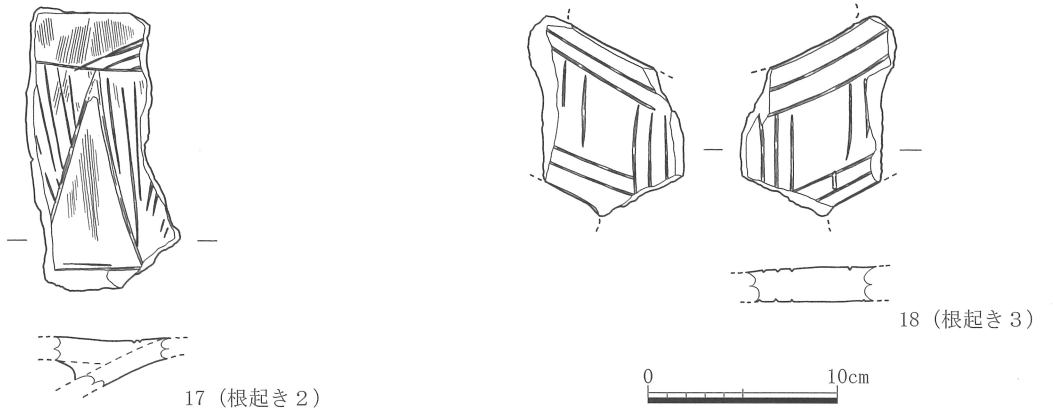
埴輪の底部は、地山（Ⅴ）の２～８㎝上に置かれている。水分を含んだ土であるため分層は困難であったが、地山の上に埴輪設置土が敷かれていた可能性も考えられる。

その後、埴輪№１～５の北側立面も掘り下げ、これらを取り上げた。また、埴輪の設置状況を確認するため、埴輪№１付近を南北方向に掘り下げ、土層の状況を精査した（第 56 図）。地山は 18.03 ｍより下で確認され、南東側に向かってやや下がっている。地山の上には墳丘盛土がみられる。墳丘盛土は標高 18.34 ｍより下でみられ、墳丘内側から外側（Ⅳａ層、Ⅳｃ層）の順に盛られている。墳丘盛土は水分を多く含み、すぐに水がたまる状況であったため、土層の詳細な検討をおこなうことが困難であり、埴輪設置のための掘方は明確には確認することができなかった。

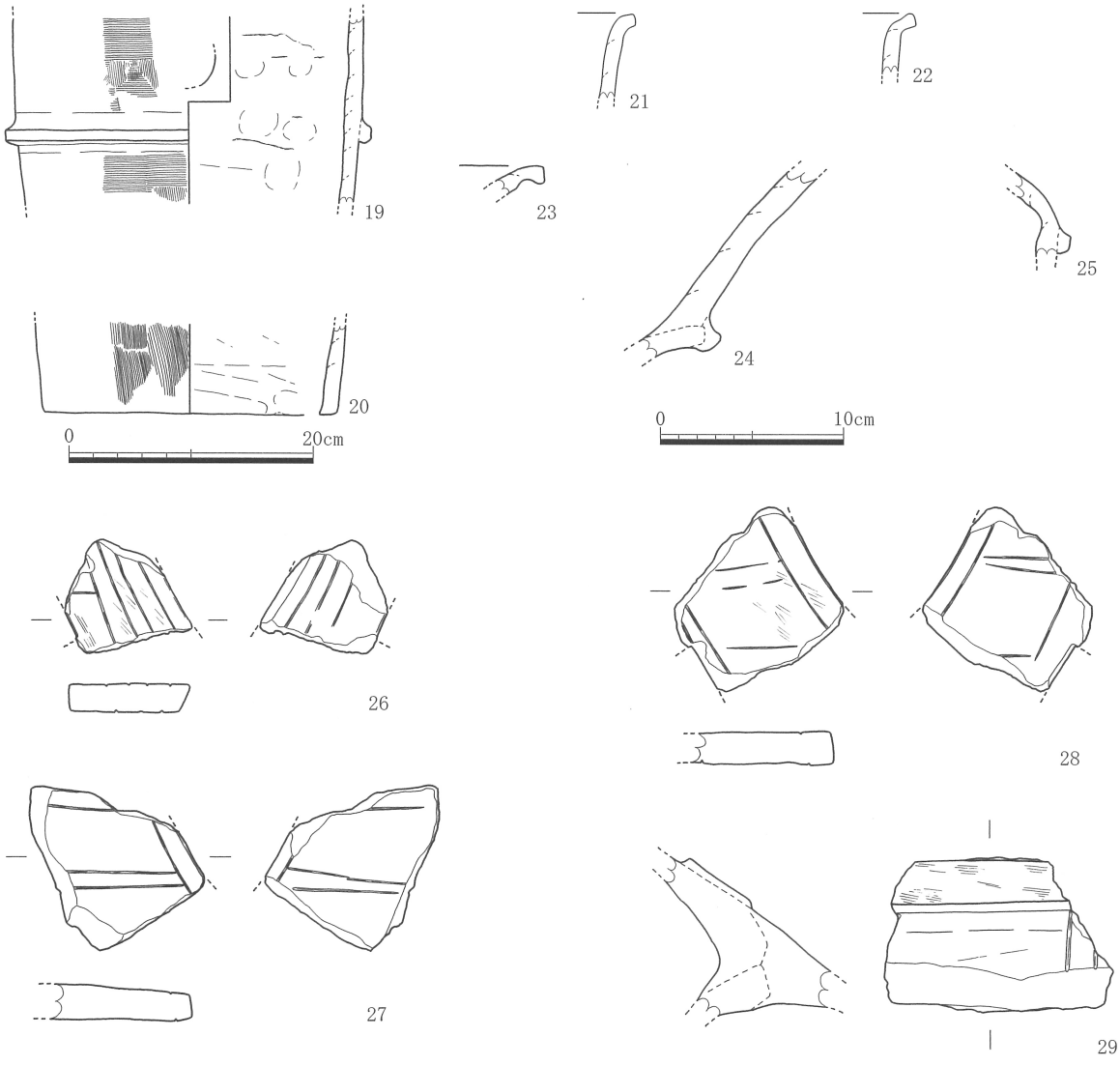
また、埴輪№１の東側（№０）、そして№５の西側（№６）からは続きとなる埴輪を確認したが、これを取り上げることはせず、土層での観察に留めた。№０の底部設置高 18.01 ｍであり、第１条突帯上まで墳丘盛土（Ⅳａ層）が確認できる。№６は底部を確認していないが、第２条突帯上まで墳丘盛土（Ⅳａ層）が確



第 58 図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所１　出土埴輪実測図（1/4、1/6）



第 59 図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所２・３　出土埴輪実測図（1/4）



第 60 図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所４　出土埴輪実測図（1/4、1/6）

認できる。（土屋）

（５）根起き箇所６

墳丘第２段平坦面の前方部東側隅角付近で確認された根起き箇所である。すでにふれたように、この根起きは事前に確認されていなかったが、調査中に埴輪の露出していることに気づいたものである。気づいたの

は調査も終盤になってからであったため、根起き部分に巻き込まれていた埴輪片を極力回収し、根起き箇所の座標を計測した。この根起き箇所６で確認された遺物は117点であった。

３．根起き箇所の出土遺物

今回の調査で確認された遺物はすべて埴輪片で、その総数は約2,200点（ビニール袋で53袋分）であった。窖窯焼成によると思われるものはなく、いずれの個体も焼成方法は野焼きであったと考えられる。円筒埴輪で確認できる透孔の形状は円形が多いものの、一部に三角形もみられる。胎土には、直径１～３㎜前後の砂粒（白色粒）が多く含まれている点が特徴である。外面の最終調整はヨコハケとなっているものが多いが、不明瞭でそれ以上の詳細がわからないものも多い。これらの特徴から、今回の調査で出土した埴輪は、川西編年[1]のⅢ期に位置づけられるものと考える。なお、今回の出土品の底径は23～27cm前後、第１段高は12cmと13.5cmと15cm前後、突帯間隔は12cm前後のものが多い。これらの数値は、本誌第72号で報告した仲津山陵の墳丘出土円筒埴輪と比較すると、同等あるいは若干縮小傾向にあるといえる。

（１）根起き箇所１出土埴輪（第58図、図版50・51）

３、４はNo.１とした円筒埴輪である。４は第１～３段にかけての資料で、底径は約27cm、第１段高は13.5～14cm、突帯間隔は11cmである。第３段には円形の透孔が穿たれている。第２段外面の最終調整はＢｂ種ヨコハケのようである。内面調整は基本的にハケであるが、突帯貼付に対応して指頭圧痕もみられる。なお、突帯剥離箇所では突帯設定のための凹線が確認できる。透孔の配置から判断して３が第５・６段の破片であるとすれば、当陵の円筒埴輪は５条６段構成（あるいは６条７段構成）といえるかもしれない。これは本誌第72号で報告した仲津山陵と同様である。

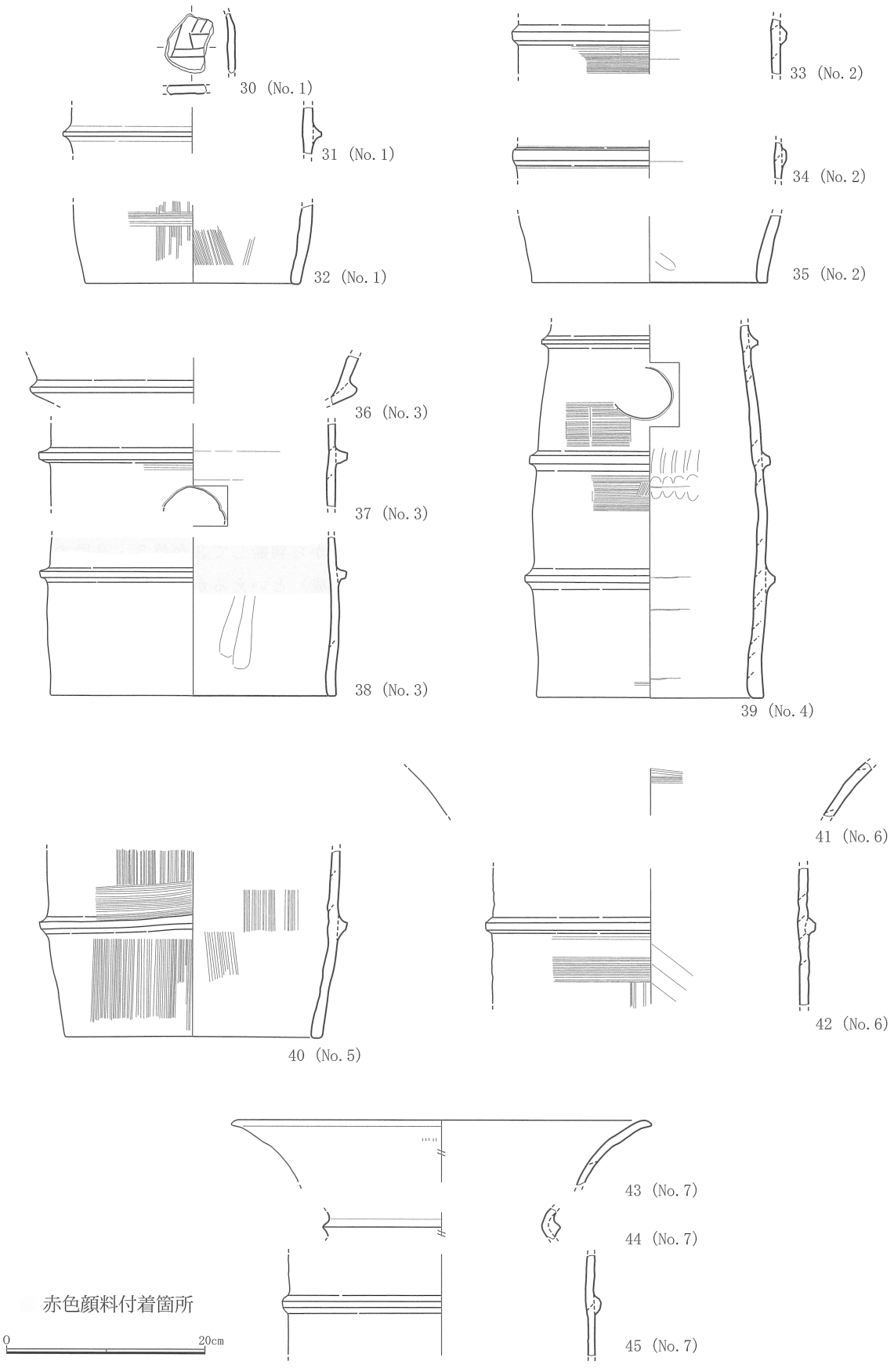
５はNo.２とした円筒埴輪である。第１～３段にかけての資料である。底部がかなり歪んで楕円形になっているため底径は21～27cm程度である。第１段高は13.5cm程度、突帯間隔は11.5～12cmである。第１条突帯には製作中に何かが上からぶつかったのか、一部が下方に押しつぶされたような状態になっている。また、各突帯の上辺には突帯設定に伴うＬ字痕がみられる。第３段には円形の透孔が穿たれている。第２段の外面最終調整はＢｃ種ヨコハケであるが、突帯間すべてをハケ原体でカバーできていない点が特徴といえる。内面調整はナデである。

６はNo.３とした円筒埴輪である。第１～３段にかけての資料で、底径は約29cm、第１段高は13～13.5cm、突帯間隔は12.5～13cmである。第１条突帯の剥離箇所では突帯設定の可能性も考えられる沈線がみられる。また、第１条突帯の下方では突帯貼付に伴う可能性のある不明痕跡がみられる。断続ナデ技法などと関連のある痕跡にもみえるが、断定はできない。さらに、各突帯の上辺には突帯設定に伴うＬ字痕がみられる。第２段のなかほどには焼成後に穿たれた小孔が貫通している。第２段の外面最終調整はＢｂ種ヨコハケである可能性が考えられる。

７は逆三角形の透孔が穿たれている点が特徴である。突帯の形状やハケメなどから判断して、７は８、９と同一個体である可能性もある。８は円形の透孔をもつ胴部の破片で、９は底部の破片である。底径は約25cm、第１段高は約13.5cmである。器壁は摩滅がすすんでいるが、一部に残存しているハケメから８と９は同一個体である可能性が高い。各突帯の上辺には突帯設定に伴うＬ字痕がみられる。

10は３条分の突帯を含む胴部の破片である。下から２段目には円形の透孔が穿たれている。下から２段目の外面最終調整は静止痕の判然としないヨコハケである。Ｂｂ種ヨコハケであろうか。その上の段はＢｃ種ヨコハケのようにみえるが、突帯間すべてをハケ原体でカバーできていない。突帯間隔は12～12.5cmである。

11、12、14、15は朝顔形埴輪の破片である。墳頂平坦面の円筒埴輪列には一定の割合で朝顔形埴輪が含まれていたことがわかる。14、15は口縁端部の形状が異なることから、少なくとも根起き箇所１周辺には朝顔形埴輪が２個体以上存在していたものと推測される。13は円筒埴輪の口縁部の破片である。口縁端部を外側に屈曲させているのが特徴である。16は形象埴輪の破片と考えられる。裏面に線刻はみられないことから、靫形埴輪などの飾板部分などであろうか。



第 61 図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所５　出土埴輪実測図（1/6）

（２）根起き箇所２、３出土埴輪（第 59 図、図版 52）

いずれも後円部墳頂平坦面から出土したものである。17 は根起き箇所 2 からの出土で、盾形埴輪の破片である。18 は根起き箇所 3 からの出土で、蓋形埴輪の立飾部の破片である。提示した図面の天地は時計回りに 90 度回転させるべきであったかもしれないが、確証はない。形象埴輪と円筒埴輪とで胎土などに差異があるようにはみえない。

（３）根起き箇所４出土埴輪（第 60 図、図版 52・53）

かつて多くの形象埴輪が採集されている前方部墳頂平坦面上の円丘にも近いことも影響しているのか、形象埴輪片が多く含まれていた。

19 ～ 22 は円筒埴輪の破片である。19 は胴部の破片で、上段には円形の透孔が穿たれている。直径は約 28 cm である。外面の最終調整は静止痕が明瞭ではないもののＢｃ種ヨコハケとなる可能性がある。18 は底部の破片で、底径は約 24cmである。21、22 は口縁部の破片である。

23 ～ 25 は朝顔形埴輪の破片である。

26 ～ 29 は蓋形埴輪の破片である。そのうち 26 ～ 28 は立飾部の破片で、29 は笠部の破片である。これまで知られていた当陵の蓋形埴輪の笠部とは異なり、大型で通有の形状となるものといえる。　（加藤）

（４）根起き箇所５出土埴輪（第 61 図、図版 54 ～ 57）

根起き箇所５では、７個体の円筒埴輪を原位置で検出し、№１～５の５個体を取り上げた。根起き箇所５の土は水分を多く含んでいたため、埴輪が柔らかくなっており、脆弱な状態で出土した。全て有黒斑である。

№１（第 61 図 30 ～ 32）は出土時は形を保っていたが、脆弱であり、表裏が分離した状態であったため、取り上げ後に接合して元の形を復元することは困難であった。そこで出土状況図の情報をもとに復元径を推定し、接合してある程度形を保った破片を図化した。推定底部径 22.0cmであり、底部高は出土状況図からみて、約 15cmである（底部から第１条突帯の中央までを計測）。第１段目の外面には１次調整タテハケ、２次調整ヨコハケがみられる。静止痕は明確には確認できない。内面には左斜め上方向のハケメがみられる。

30 は線刻をもつ埴輪である。横方向、右斜め上、左斜め上方向の線刻を組み合わせて何らかの文様が表現されているが、破片であるため全容は不明である。№１の中から出土したことからみて、円筒埴輪の破片であろう。線刻がみられる埴輪は当陵の他の箇所からも出土している。

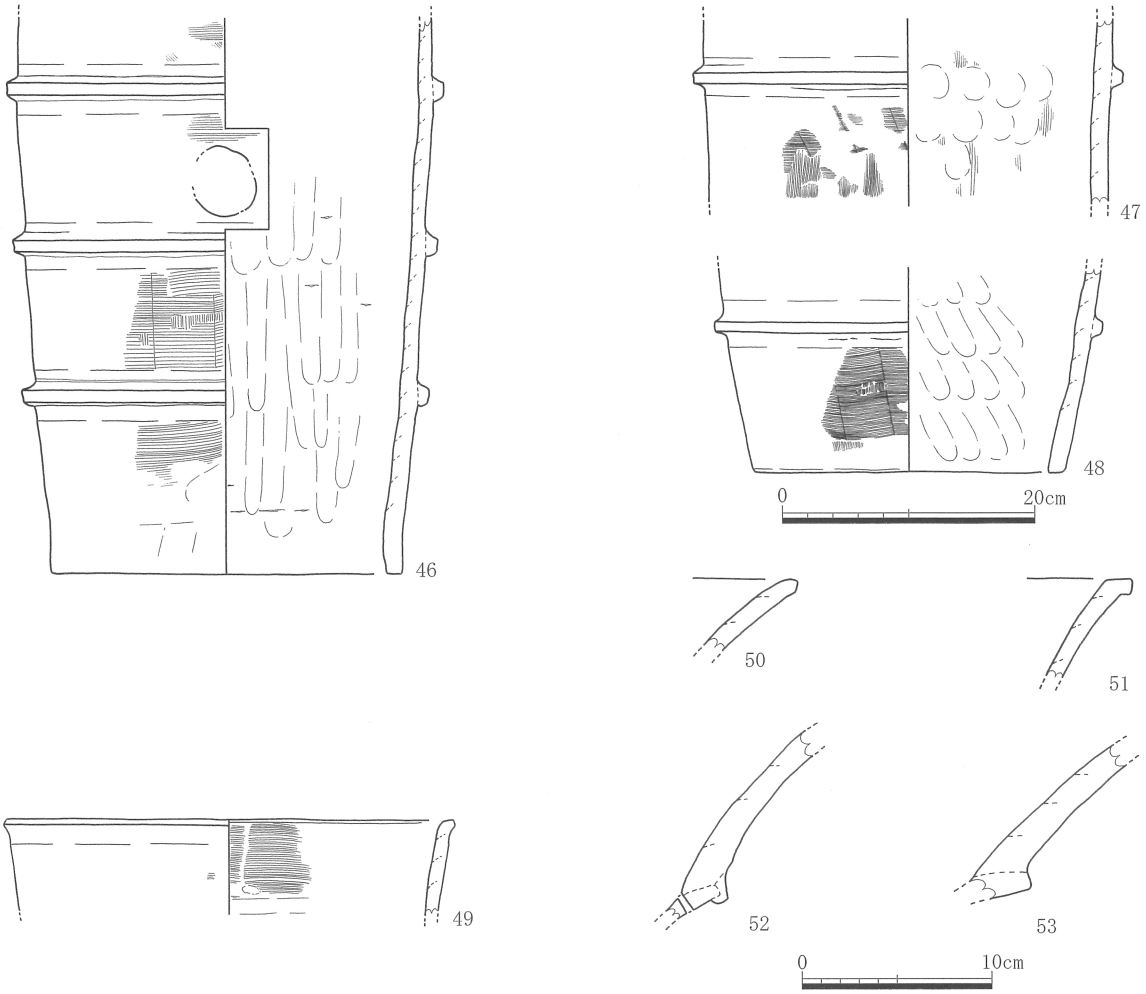
№２（第 61 図 33 ～ 35）も№１と同様に、取り上げ後に接合して元の形を復元することは困難であったため、出土状況図の情報をもとに復元径を推定して図化した。推定底部径 24.0cmであり、底部高は出土状況図からみて、約 13cmである。表面が剥離しているため、外部調整は不明である。第２段目の突帯間隔は約 12 cmである（第１条突帯と第２条突帯の中央間を計測）。図では、何条突帯であるかは不明であるが、突帯形態の異なるものを２つ図化した。33 には、外面調整ヨコハケがみられ、Ｂｂ種あるいはＢｃ種とみられる静止痕が確認できる。

№３（第 61 図 36 ～ 38）は第１段目が比較的良好な状態で出土した。接合関係からみて第１段目が一周分残存していることを確認しているが、破面が摩滅しており、接合が困難であったため、接合はしていない。全体的に白色を呈する個体であり、近くの埴輪とは色調が異なっている。38 は推定底部径 28.8cm、底部高は 12.5cmである。第１条突帯付近で赤色顔料が外面、内面ともに付着しており、おそらく意図的に塗られたものであると考えられる。内面には一部タテナデが確認できる。

またどの位置にするものであるかは不明であるが、円形透孔をともなう突帯部分の破片（第 61 図 37）を図化した。外面調整ヨコハケが確認できるが、静止痕の有無は不明である。

36 は朝顔形埴輪壺部の口縁部突帯と考えられる破片である。径約 33cm に復元できる。突帯の下には、連続した三角形の調整痕がみられる。№３は朝顔形埴輪であったと考えられる。

№４（第 61 図 39）は根起き箇所５で最も良好な状態であり、底部から第４段目途中までが残存している。径１～５㎜ほどの白色粒子を多く含んだ特徴的な胎土である。底部径 23.0cm、底部高は突帯が水平に取り付けられていないため場所によって差があり、11.6 ～ 12.5cmである。外面調整は明確ではないが、一部にヨコ



第 62 図　百舌鳥耳原南陵　根起き箇所６　出土埴輪実測図（1/4、1/6）

ハケがみられる。第２段目は突帯間隔 12.0 ～ 12.5cm（第１条突帯と第２条突帯の中央を計測）であり、外面には一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケがみられる。静止痕は明確ではない。第３段目には円形透孔がみられる。突帯間隔は 12.2 ～ 12.5cmであり、径が小さくなっている。外面調整ヨコハケがみられ、縦方向の静止痕が一部にみられる（Ｂｂ種またはＢｃ種ヨコハケか）。内面にはタテナデ調整が見られるが、部分的であり、粘土紐の接合痕が残存している。

№５（第 61 図 33 ～ 35）は№１、２と同様に、取り上げ後に接合して元の形を復元することは困難であったため、出土状況図の情報をもとに復元径を推定して図化した。推定底部径約 26cm、底部高 11.5 ～ 11.7cmである。底部の外面調整にはタテハケがみられる。第２段目は途中までしかわからないが、出土状況図からみて突帯間隔は約 12.5cmである。外面調整は不明であるが、別の破片からみて、一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケ（静止痕不明）であったと推定される。内面にはタテハケによる調整が確認できる。

№６（第 61 図 41 ～ 42）は掘り下げずに現地で保存したが、上面で出土した破片を一部取り上げた。図化した 42 は何段目の突帯であるかは不明であるが、復元径は 32.0cmである。外面の一次調整タテハケ、二次調整ヨコハケで、静止痕は不明である。内面には左斜め上方向のナデ調整がみられる。41 は朝顔形埴輪壺部の一次口縁、あるいは二次口縁の破片である。外面調整は不明であり、内面にはヨコハケがわずかに確認できる。

№７（第 61 図 43 ～ 45）も掘り下げずに現地で保存したが、上面で出土した破片を一部取り上げた。図化した 45 は何段目の突帯であるかは不明であるが、復元径は 31.0cmである。外面調整、内面調整ともに不明である。また、破片の中には朝顔形埴輪壺部の二次口縁（43）と頸部突帯の破片（44）が出土した。二次口

縁外面にはわずかにタテハケがみられる。43と44は残存部位が少ないため径は不明である。

№６、７からは朝顔形埴輪の破片がともなって出土したが、朝顔形埴輪が隣同士で設置されたとは考えにくいため、どちらか片方が朝顔形埴輪であり、隣の個体の内部に入り込んだものと推定される。　（土屋）

（５）根起き箇所６出土埴輪（第62図、図版57・58）

墳丘第２段平坦面の前方部東側隅角付近から出土した埴輪で、形象埴輪は確認されていない。46は円筒埴輪の第１～４段にかけての破片で、第３段に円形の透孔が穿たれている。底径は約28cm、第１段高は14.5～15cm、突帯間隔は約12cmである。第２段の外面最終調整はＢｂ種ヨコハケのようにもみえるが判然としない。各突帯の上辺には突帯設定に伴うＬ字痕がみられる。内面調整はナデである。

47と48は同一個体と思われる円筒埴輪片である。底径は約24cm、第１段高は約12cmである。外面の最終調整は静止痕の間隔が短いものの傾いており、Ｂｄ種ヨコハケといえるかもしれない。内面調整はナデが主体である。

49は円筒埴輪の口縁部の破片である。口径は約36cmで、内面の口縁端部付近にまでヨコ方向のハケがほどこされている。口縁部は端部をわずかに外側へ屈曲させた形状である。

50～53は朝顔形埴輪の口縁部の破片である。52と53では１次口縁と２次口縁の接合方法が異なることがわかる。なお、52では２次口縁の粘土紐積み上げが開始されるあたりに焼成後の穿孔がほどこされている。50と51では口縁端部の形状が異なっている。　（加藤）

まとめ

当陵の墳丘内ではこれまで前方部墳頂平坦面上の円丘周辺で形象埴輪が採集されていたが（本誌第46号）、円筒埴輪の詳細な様相は不明であった。今回の調査では、墳丘内の各所における平坦面上の円筒埴輪列を構成していたと考えられる円筒埴輪・朝顔形埴輪を多く確認することができた。これらの平坦面の円筒埴輪列を構成する円筒埴輪は、鰭をもたない通常のものであった。一方で前方部墳頂平坦面上の円丘周辺では鰭付円筒埴輪が確認されている（本誌第64号）。このことを積極的に評価すれば、当陵において墳丘平坦面に設置された円筒埴輪列では鰭をもたない通有の円筒埴輪・朝顔形埴輪が使用され、墳頂部の埋葬施設などに関係するような箇所では鰭付のものが使用されていた可能性がある。その当否は別にしても、今回の調査の出土品が、今後の研究で活用されていくことを期待したい。

なお、今回の調査は台風による倒木被害の復旧に伴うものであったが、当陵では調査箇所を主として倒木の伐採を実施し、墳丘内で処理をおこなった。　（加藤・土屋）

註

（１）　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２・４号、日本考古学会、1978・79年。

1　根起き箇所１全景　調査前（南東から）

2　根起き箇所１全景　調査時（南東から）

3　根起き箇所１　調査状況（南東から）

4　根起き箇所１　調査状況

5　根起き箇所４全景　調査前（南西から）

6　根起き箇所４　調査状況（南東から）

7　根起き箇所４　土層断面（北東から）

1　根起き箇所５全景　調査前（南西から）

2　根起き箇所５　埴輪列（写真上が南東）

3　根起き箇所５　埴輪列　立面掘削後（南東から）

4　根起き箇所５　埴輪№１・２（南東から）

5　根起き箇所５　埴輪№２・３（南東から）

6　根起き箇所５　埴輪№４・５（南東から）

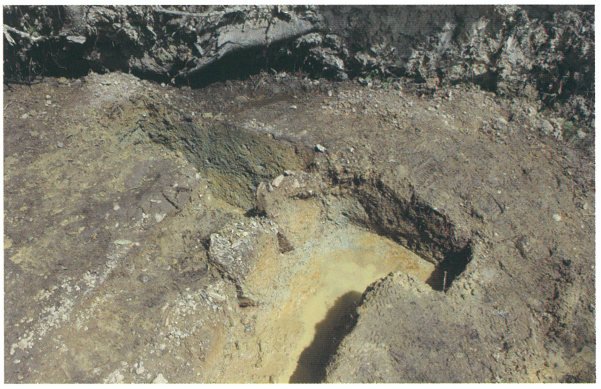
7　根起き箇所５　埴輪列　立面掘削後（南西から）

8　根起き箇所５　埴輪列　半裁後（南東から）

1　根起き箇所５　埴輪№１・２（南東から）

2　根起き箇所５　埴輪№２・３（南東から）

3　根起き箇所５　埴輪№４・５（南東から）

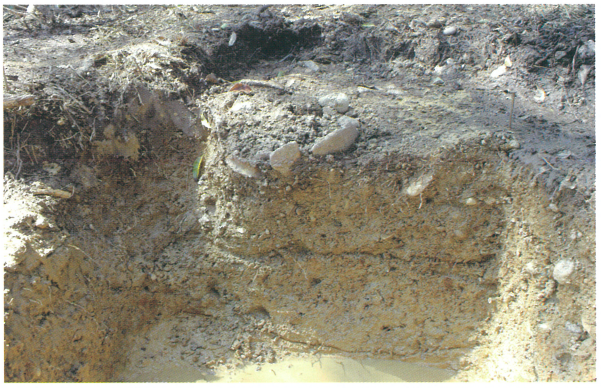


4　根起き箇所５　埴輪№１掘削拡張（南から）

5　根起き箇所５　埴輪取り上げ後（南東から）

6　根起き箇所５　埴輪取り上げ後（南西から）

7　根起き箇所５　埴輪№０（南西から）



8　根起き箇所５　埴輪№６（北東から）

1　根起き箇所１　埴輪№１（４）

2　根起き箇所１　埴輪№２（５）

3　根起き箇所１　円筒埴輪胴部（10）

1　根起き箇所１　埴輪№３（６）

2　根起き箇所１　円筒埴輪片（上：８、下：９）

1　左：根起き箇所２　盾形埴輪片（17）　右：根起き箇所３　蓋形埴輪片（18）

2　根起き箇所４　円筒埴輪片（左上：22、左下：21、右：19）

1　根起き箇所４　蓋形埴輪片（左上：27、左下：28、右：29）

2　根起き箇所４　不明線刻埴輪片

1　根起き箇所５　埴輪№１（30 ～ 32）

2　根起き箇所５　埴輪№２（33 ～ 35）

1　根起き箇所５　埴輪№３（36 ～ 37）

2　根起き箇所５　埴輪№３（38）

1　根起き箇所５　埴輪№４（39）

2　根起き箇所５　埴輪№６（41）

3　根起き箇所５　埴輪№６（42）

4　根起き箇所５　埴輪№５（40）

1　根起き箇所５　埴輪№７（43 ～ 45）

2　根起き箇所６　円筒埴輪　胴～底部（46）

1　根起き箇所６　円筒埴輪片（47）

2　根起き箇所６　円筒埴輪片（48）

3　根起き箇所６　円筒埴輪片（49）

4　根起き箇所６　朝顔形埴輪片（52）

5　立会調査出土品　備前焼（左：１）・磁器（右：２）